

社会を「自分ごと」にする受容と対話のチカラを開発教育で

「開発教育やSDGsは知らなかった。ただ、世界と地域、そして学校(生徒)を繋げたいと思い、ユネスコ国際研究部を立ち上げて活動を進めていくと、つながりが広がり、開発教育やSDGsが身近になった。」
そう語る田橋 知直先生(追手門学院中学校・高等学校 英語教員)に、JICA教師海外研修に参加する前後で得た気づきや、授業で生徒に伝えたいことについてお話を伺いました。

「地域の中のつながり」を生む活動から始まった、開発教育・SDGsに触れるきっかけ

この夏、JICA関西の教師海外研修でルワンダに派遣いただきました。ルワンダでのテーマは「紛争からの和解、赦し」。内戦から復興に向かうルワンダの今に触れながら、対話の大切さやコミュニティや居場所について強く考える時間となりました。

もともと、地域に貢献したい、という想いから3年前に「ユネスコ国際研究部」を立ち上げました。その後、校舎移転したことに伴い、新たな地域との繋がりを強めていきたい！と考え、それまで草の根ボランティアや校内啓発をしていたユネスコ国際研究部の活動軸を、地域貢献に大きく移しました。なので、最初は国際理解教育や開発教育、SDGsという知識やグローバルな視点よりは、ローカルな問題に意識が向いていました。



今思えば、ユネスコ国際研究部の立ち上げ時に地域の施設を訪問する中で、「社会からの疎外感」を感じている人がいると体感したことも、開発教育やSDGsの「誰一人取り残さない」というキーワードに興味を持つきっかけだったかもしれません。そんな身近なコミュニティの中にある課題に気づいた時、自分たちに何が出来るのか？を生徒たちが自らに問い始めたんです。そして、今あるもので出来ることはないか、コミュニティの人々を巻き込んで「新たなつながり」を作ることや、橋渡し役として学校・生徒が関われることはないか、と模索する中で、現場でアクションを起こしていくと、大事だと思うことは開発教育やSDGsの持つ価値と重なる、ということが何度も起きて、周りの仲間にも開発教育やSDGsに近い方が増えていきました。

もう一つ、教師海外研修に参加するきっかけとして、昨年参加したGiFTのOPEN LABがあります。このときは、「SDG4.7教育」をテーマに、フィリピンへ行き現地の教育関係者とともにテーマに沿った実践授業を行いました。現地のコミュニティで教育と向き合う仲間と、子どもたちの未来を創る教育を実践するという体験を通じて、「お互いを理解し、受け入れること」「未来に向かい、ともに創ること」など、開発教育、SDGs教育の持つ価値を強く実感し、ローカルな視点に留まることなく、グローバルに興味を広げていくきっかけになりました。(OPEN LABでの田橋先生の授業案)



地元の学校を訪問
教員の先生と教育について熱い
議論を交わしました

「グローバルの中に生きる自分」にとってのローカルと開発教育の価値

そして今年、改めて外での学びを深めたい！社会からの気づきを自分ごとにして活動できる生徒を増やしたいと思って挑戦したのが、今回のJICA関西の教師海外研修でした。

日本とは全く異なる環境、状況にある現地ルワンダで感じた開発教育の要素は、まさにこれまで私が体験し、教育で自分が大切にしたいと挑戦してきたことを振り返る機会となりました。

例えば、テーマが「紛争からの和解、赦し」であったこともあり、ムトボ武装解除社会復帰センター(元民兵として政府軍との戦いに関わった人々を社会復帰させる施設)を訪問しました。ここでは「戦うことしか知らない人達を社会に戻していく。事実を隠すのではなく、話し合いで元のコミュニティに戻すように試みる仕組みが有る」ということを知り、これはユネスコ国際研究部での地域の活動で感じた「誰一人取り残さない」に紐づく考えで、ルワンダは「人を大切にする国」なんだと感じました。

その一方で、訪問先の復興活動に対して、参加者の中にはいろんな捉え方をする人がいました。そこで自分はどうか感じ、それをどう表現するのか。ただ感動を感じるのみで終わってれば、理想のゴールを想像することだけで終わっていたかもしれないところを、反対の意見を知ることで更に自分の意見を深めていくことができる。ルワンダでの訪問先での体験、そして参加者同士の振り返りから、改めて受容や対話のプロセスの重要性、対話がもつチカラを感じたんです。

帰国後の実践授業では、ルワンダの体験談と併せて、BBCの記事やルワンダの教科書を利用した英語での情報収集、ディスカッション(必要に応じて母国語)を行います。その際に「情報を鵜呑みにせず、本人にとっての『正解』を表現できるように、生徒自身が世界を自分ごと引きつけ、考え、彼らなりの言葉で話せる機会にできる」よう、丁寧な深い対話に重点を置いた授業を計画しています。

そのような授業を通して、「多角的に物事を捉え、異なる人との出会いから、学び、理解し、受け入れ、それらを社会への興味関心のタネにする」ことができる人材を育成する。それは、授業以外のユネスコ国際研究部の活動の一つ、子ども食堂支援など様々な人への「居場所作り」や、地域と生徒を結ぶことにも繋がっていると感じています。



校舎に入っすぐSDGs特集の本棚。司書の先生と相談をして1ヶ月サイクルでSDGs関連の新しい図書が展示されるようになっていきます

JICA教師海外研修についてはこちら

JICA 地球ひろば